

歴史館まなび隊

4

片倉組(日本を代表する製糸会社)事務所の外観



1878(明治11)年、後に片倉製糸紡績株式会社のもとになる垣外製糸場が、諏訪郡川岸村(岡谷市)に片倉兼太郎によって造られました。兼太郎は工場の数を増やし、1890(明治23)年には松本にも製糸場をつくりました。1894(明治27)年には片倉組というグループに発展しました。

歴史館の常設展示室では片倉組の事務所一階の外観を原寸大で復原しました。みなさんが見ているのは、玄関の反対側です。この建物は、1910(明治43)年に建てられています。石柱と煉瓦の壁を組み合わせたこげ茶色の外観が当時のモダンなおもむきを

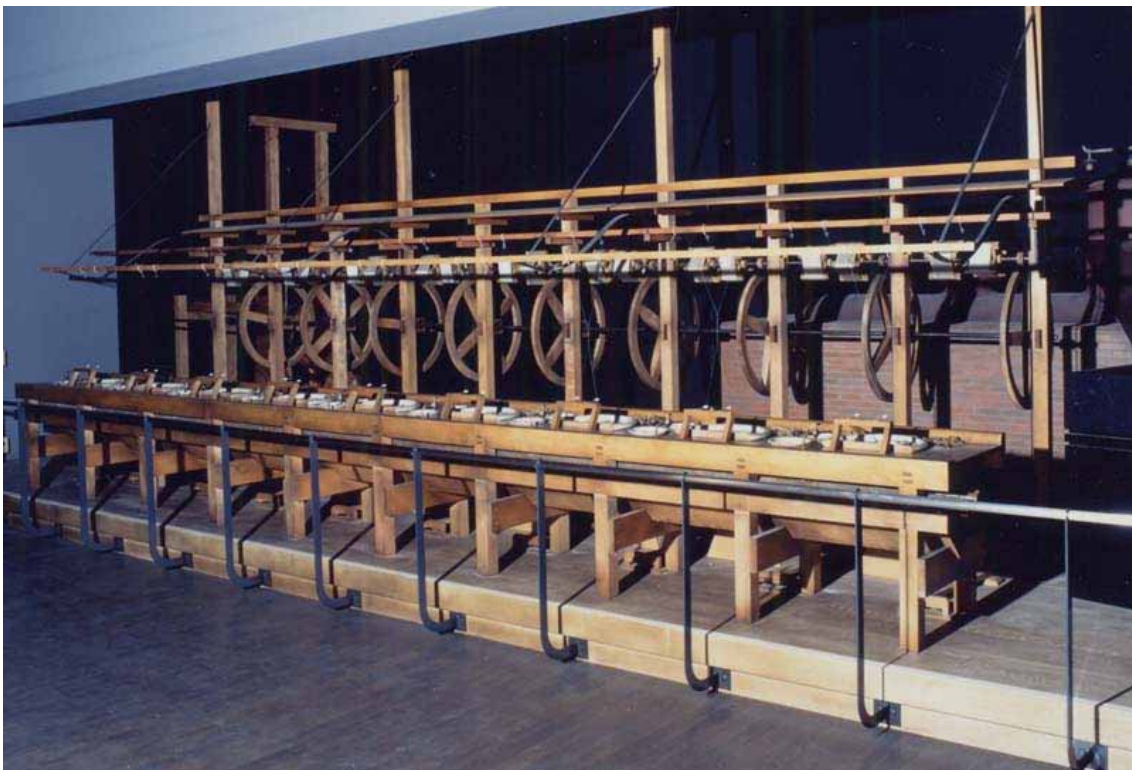
伝えています。現在も中央印刷株式会社の事務所として使われ、国の登録有形文化財になっています。

<片倉組の煉瓦造について>

この建物は煉瓦造に見えますが、実は木筋煉瓦造です。外壁にこのころ流行していた釉薬をかけて焼いた煉瓦を張ったものです。釉薬をかけて焼いた煉瓦は強度も強く、雨や凍結にも強いものでした。冬の寒さの厳しい岡谷の風土にあります。

埴科郡西条村六工製糸場(日本初のフランス式民営製糸場)

ここは、1874(明治6)年、埴科郡西条村六工(長野市松代町)にできた六工社という製糸工場の復原です。そのころの日本は、生糸が重要な輸出品でした。明治政府は日本を豊かにするために蚕糸業に力を入れました。六工製糸場は群馬県にあった官営富岡製糸場をモデルにつくられました。フランスの製糸工場技術を取り入れました。民営では日本で初めての導入です。一度に50人が座って作業ができることから「フランス式50人繰り」の製糸工場と言われました。これが長野県の器械製糸工場のはじまりといえます。



工場の蒸気釜は地元の松代焼きの釜が使われています。考案者は海沼房太郎です。当時、地元にはボイラーはもちろん煮繭や繰糸の釜、蒸気をとるパイプなどをつくる技術がなかったので、蒸気器械をつくり出すことはたいへんな苦労をしました。繭を二つに切って釜の形を考え、針金を蒸気のとる管に見立ててミニチュアのモデルをつくり、蒸気器械をつくりあげたといわれています。松代焼きの釜は凍みに強く、使いやすい利点がありました。

糸繰り器の下を見てみましょう。ペダルがついています。何のためについているのでしょうか？みんなで話し合ってみましょう。